

クレアモント



井坂康志

ピーター・F・ドラッカーに

目次

小瓶
即興曲
タイプライター
革命
孤独
ハル・レヴィット教授
老木
道標
藤椅子
選択
影

曇天

書齋

最後の希望

幻

封印

インディアン・ヒル

ぶどう畑

サンタ・モニカ

墓標

アメリカ

てのひら

クレアモント・イン

東へ

小瓶

液体は注がれる

深く醸された酒のように
飴色の小瓶に

賢人よ

あなたの小瓶の中に
茜色の大洋の広がり
巨大な夕陽の沈みゆく

だから

急ぐことなく

競うことなく

液体は小瓶に注がれる

小瓶の口から

別の小瓶の口へと

重たいガラスの

乾いた金属音とともに

賢人よ

綾かに筋を引いて

細く液体は落ちていく

新しい小瓶に

液体は注がれる

絶望も希望も

涙も優しさも

もう一つの小瓶に
もう一つの世界の
ふたたび醸され
あの琥珀の時間の
取り戻される

即興曲

円状の大理石

アイヴォリーのピアノ

重たく沈む黒鍵の調べ

乾いた砂漠の風

みはるかすセピアの山並み

昔日の旅路

タイプライター

大気の地をめぐり

霧の丘をつつみ

森を驟雨の抜け

陽炎の川面を灼き

手のひらの汗を拭く

魂は哀しみを知り

心は涙に濡れて

古いタイプライターは

真夜中の戦場で

柔らかな救済の音楽を

今日も奏で続ける

革命

革命家は

何を変えたか

人と生まれたからには

何を変えようか

愚にもつかぬ新しさや

くだらない流行の

もてはやされ

いくら詰め込んでも

さっぱり賢くなりはしない

よしんば今日

新しい毛沢東が

新しいヒトラーが

新しいスターリンが

颯爽と白馬に乗って現れれば

諸手を挙げてついでいく

そんなやつらばかり

分裂ではなく

批判でなく

融合し帰依し信じることで

詩人にして真の革命家だった人がいた

そんなことさえ

知る者はない

孤独

孤独ならざるリユンケウスがあるか

見るために生まれた者の魂に

そしてその目に

大洋ほどの涙の湛えざることがあるか

美しくありつつ

悲しくないものがあるか

心情でありつつ

運命につらなることなきものの

この世界にあるか

ハル・レヴィット教授

魂のみの魂を知るように

悲しみの霊のみの

名もなき悲しみのしずくを知る

その瞳には

誰にも知られることなく

誰をも知ることのない言葉で

太古の神話の記される

レヴィット教授

パサティーナの燃える五月の緑の中で
私は裂くごとき魂の轟音を耳にした
紅海をモーセの一行のわたるように
死海の洞穴にひそむ使徒たちのように

つややかなその低い声

古木のやさしく匂う

霧たちそめる森の道

朝の田園に響く

ファゴットの音色に似て

老木

老木は朽ちるとも

慈雨はそうそうと下りてくる

あの万葉のさざめきは

今日も異郷の月影に映る

老木の死ぬことはない

それは永遠の形相の

影の影に過ぎぬのだから

道標

地平に弾丸の放たれたように

一本の道を通る

明日へと続く道標

漂白の苦しみも

肉体を持って生きる哀しみも

何もかもを知る

はるかアトランティスから

火山の死んでる欧州を抜けて

大西洋を渡ってきた

灰色に縁取られた道標

籐椅子

私は賢人の籐椅子
静かに、あの白い山並みの
朝靄のように

かの東洋の六月の
あるかなきかの雨のように
大地に同通する
古来の賢人の
身をお受けする
それは私の役目

賢人の足を組み

長い指先を合わせて
ときどき体の位置を
ゆったりと調整する

古代の哲人王のように

かのやさしいバスの音色と

言葉なき涙の

滝のごとくしぶくを聞いた

私は賢人の籐椅子

選択

不条理の人生は

神ならぬ生身に

あれかこれかの

選択を迫らずにおかない

あるのは無限の選択と

組み合わせのみなのだよと

賢人はめくばせする

鉄のごとき吐息に

選択と責任の重みに

今深くこの地で呼吸する

クレアモント

賢人の最終地点

魂を憩わせ

死に赴く場所と定めた

選択の地

影

詩人よ、君の仕事をなせ
あの古い成句にあるように
君は夢を解く人

暗くはてしない

地下をさかまく汽水湖の

潮目を読む

詩人よ、それは君の仕事だ

言葉は黄泉の鳥に似て

その予兆の予兆性は

あの影の世界にすでに具現する

詩人よ、恐怖から目を背けるな
湖面のざわめきを凝視せよ

それは内実を取り巻く外皮
形態によって表現された
君自身にほかならぬのだから

曇天

灰色の瞳に

あっけらかんと無反省な

ブルーの空

あの欧州の曇天の

二重写しになる

書齋

堅い黒マホガニーの書棚に
しっくりと収まるのは

プラトン

アリストテレス

アウグスティヌス

バーク

キルケゴール

ブルクハルト

白隠

トクヴィル

シェイクスピア

闇のつくり出す

反転したもう一つの苦言に

耳を傾けるなら

甘い情緒も

口当たり良い冗句も

白痴を喜ばせる小話も

そこにはない

あるのはただ

救いえなかった者の

声にならぬ慟哭

絶望と慚愧

最後の希望

全身汗に濡れた

黒い裸馬を見よ

錆びた甲冑に身を包む

騎士の姿はもはやない

灰色の岩山に

黒鷲の二羽もつれども

あの呼び声は聞かれない

幻

赤土と礫のはてしなく

傷つき疲れた

末法のファウストたちは

あのカリフォルニアの山並みを仰ぐ

新しいワルブルギスの夜は

はじまってさえない

封印

ツアラトウストラは沈黙する

無意識の二重扉に重たい錠は下ろされた

知識社会がやってきて

万人に与えられ

何人にも与えられぬ

知識は封印され

長い回廊を渡り

暗黒の地下牢で

ヘンリー二世と戯れる

インディアン・ヒル

晴朗の雲の憩う丘の

乾いた赤土の岩窟から

神々の棲まう山並みを仰げば

白い昼の三日月

天空いっばいにフェニックスの

いずくへともなく往くを見る

谷間に咲く青紫の一輪の花の

うつむきつつ語る

この地の聖地であったことを

ぶどう畑

屋根裏部屋から見下ろす
ハイリゲンシュタットへと続く
緑なすぶどう畑の小道

生死の選択を行い
遺書を思いつつ

交響曲第五番の二楽章に
形を与えたウィーン一九区の森

教会堂の尖塔に
灰色の雲の細長く
今日もたなびいているだろう

サンタ・モニカ

サンタ・モニカの大洋に

今日も夕陽の沈み往く

グラスの縁は虹色のきらめき

ウィスキーのダブルの向こう側に

セピア色の失われた世紀の

太陽とともに溶けてゆく

墓標

偽りの文明を支える

うつろな人々

顔を持たぬ人々

休戦協定は破棄された

さあ武器をとれ

霊の武器を

言葉の剣

意志の胸当て

隠喩の甲冑

論理の盾

武器をとれ

とほうもない暗黒

心許せるものなど何もない

叡智の鉄と詩の水で

サーベルを鍛えよ

ワルシャワの地下水道で散った

あの同志たちを思え

下品さ軽薄さを許すことなく

断固として刀を棄てなかつた

あの同志たちを

救済はどこにあるか

見渡せば

信じるに足るものなど

あったためしはない

肩に食い込む十字架

勇気が

勇気だけが

あの方の墓標だ

そこにはこう書かれている

「自らの時代とたたかう人」

アメリカ

自由の魂によって創造され

詩人によって生命を吹き込まれ

政治家を聖人とした国

神は語りかけるのをやめた

緑なす大地は

精神の荒野となり

死してなお死を悟ることなき

呪われた船乗りのように

拓くべき航路も

見出すべき交易も

どこにもありはしない

てのひら

年老いたやさしいいきもののように
世の苦吟をあえて語らず
高原に降る雨を
指揮する風のように
白く乾いたてのひら

クレアモント・イン

西部の粗い風に洗われ

宿屋の立つ

赤いスカーフの若いカウボーイの

一杯のバーボンを求め

その上をそうそうと

不吉な黒い鳥の舞い去っていく

東へ

賢人よ

あなたの魂は

何を見てきたか

見知らぬ者としてやってきて

見知らぬ者として去ってゆく

文明の中心地に生まれ

東へとひたすら

旅を続け

かの白隠や仙厓を師とし

焼け付く日常の些事に

彼岸の靈眼を向け続けた

賢人よ

あの富士の白き峯を

さかまく松原の沖から仰ぐように

賢人よ

あなたを師としたことを

恥としない